

かさまのれきし

第91回



筑波海軍航空隊司令部庁舎（笠間市指定史跡）



慰霊碑

筑波海軍航空隊と

神風特別攻撃

昭和九年（一九三四）八月に霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣隊が設立されました。海軍の初等教育班として戦闘機搭乗員を養成する基地でした。開隊式は九月二十九日に第九格納庫を式場に挙行されました。初代分遣隊司令は三木森彦中佐で、一般兵より採用された操縦訓練生が、三式陸上初歩練習機、九三式中間練習機（赤とんぼ）で操縦訓練を開始しました。その後、予科練習生や少年航空兵が入隊し、基礎訓練が行われました。訓練期間は六か月間で、卒業前の修了試験は三重県の鈴鹿海軍航空隊までの往復飛行でした。

昭和十二年七月、支那事変（日中戦争）が勃発すると航空機の重要性が高まり、翌年十二月、霞ヶ浦海軍航空隊の分遣隊から独立して筑波海軍航空隊になりました。谷田部海軍航空隊（つくば市）や筑波海軍航空隊の分遣隊として百里原海軍航空隊（小美玉市）も設置されました。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発すると、予科練出身の練習生も増加し、発着・上昇・急降下・旋回等の激しい訓練が行われました。筑波海軍航空隊での操縦訓練を修了した搭乗員たちは、東南アジアの激戦地に配属され、次々に戦死していきました。毎年の修了生の九割以上が戦死しました。優秀な搭乗員を失った軍は、昭和十八年ごろから大学を卒業したばかりの飛行予備学生を大量に採用しました。昭和十九年秋には、神風特別攻撃戦が展開されました。特攻作戦の採用について、筑波海軍航空隊の海軍兵学校卒業の操縦教官四名が、その諮問に当たりました。そして、

フィリピン戦の特攻に筑波海軍航空隊から二十五名が選抜され、十二月から翌年一月にかけて十二名が特攻散華し、八名が戦死しました。

昭和二十年二月に筑波海軍航空隊に神風特別攻撃筑波隊が六十四名で組織されました（後に八十四名となる）。特攻隊員はほとんどが予備学生で、二月から三月にかけて夜間訓練や急降下操縦等の猛訓練が実施されました。

第一筑波隊十七名は、四月六日に鹿児島県鹿屋基地から沖縄に向けて飛び立ち、全員が散華しました。以後、第六筑波隊まで五十五名が五月十四日まで散華しました。さらに六月二十二日に、第一爆戦隊として、筑波海軍航空隊員五名が沖縄の海に散っていききました。第六筑波隊の富安俊助中尉は、アメリカ航空母艦エンタープライズに特攻攻撃を敢行し、空母を廃艦に追い込みました。また、第五筑波隊の石丸進一少尉は職業野球名古屋軍（現中日ドラゴンズ）のエースとして活躍していましたが、筑波海軍航空隊に入隊して特攻を志願し、沖縄周辺機動部隊を攻撃し散華しました。戦後、彼を悼む友人たちによって映画「人間の翼―最後のキャッチボール」がつくられました。東京ドームの入り口にプロ野球選手の戦没者六十七名の「鎮魂の碑」が建立され、石丸選手の兄が「追憶」を刻んでいます。

平成十一年（一九九九）六月に、元筑波海軍航空隊員が、戦死した戦友の慰霊碑を建立し、「慰霊の集い」を挙行しました。碑には「筑波海軍航空隊ここにありき」と刻み、「ここに万感の愛惜をこめてその鎮魂を祈り且つ恒久の平和を念じてこの碑を建てる」と記されています。慰霊の集いは、毎年平和への願いを込めて厳かに続けられています。旭町の筑波海軍航空隊跡は、現在茨城県立こころの医療センターになっていますが、航空隊当時の面影をよく残しており、貴重な戦争遺跡になっています。

市史研究員 南 秀利